

資料紹介 琉球王国における染織注文書

平川 信幸*

Notes on Historical Materials for the Order Form of Dyed in the Ryukyu Kingdom

Nobuyuki HIRAKAWA

はじめに

納殿関係資料とは、「大台所より納殿宛の染紙注文書」(以下「染紙注文書」と略記する)、「納殿より知念筑登之親雲上宛の発注書」(以下「知念宛発注書」と略記する)、「澤崎家旧蔵の納殿発注仕分帳」(以下「澤崎家仕分帳」と略記する)と題された3件の資料で、いずれも染色に関するものである。これらの資料は断片的であるが、多くの資料と組み合わせることによって近世琉球期における、王府と職人の関係など少しでも解明できる手立てになるのではないかと思われる。

まず、語彙の説明として「納殿」というのは、『琉球国由来記』によると、国王の私生活の場であった御内原の薬やお茶、煙草などの日用品を扱う部署とあり、これらのもの以外に染物や紺屋を管理したようである¹。

また、「知念宛発注書」、「澤崎家仕分帳」の2件には家名がついており、紺屋にどの様な人々が携わっていたわかる。さらに、知念家のものには、宛名が「知念筑登之親雲上」とあって、紅型を染めていた職人が王府内で位階をもつ役人であったことが確認できる。余談になるが、「知念家」・「澤崎家」の両家に「城間家」を加えると、王朝時代から紅型を担ってきた三宗家となる²。

最後に、資料の旧所蔵者についても1964(昭和39)年に出版された鎌倉芳太郎氏解説の紅型の写真集『古琉球型紙の研究』(以下『型紙研究』と略記する)³に資料収集の様子が記載されており、明らかになっている。

『古琉球型紙の研究』の中の納殿資料

「染紙注文書」、「知念宛発注書」、「澤崎家仕分帳」の三件の資料は、1964(昭和39)年に型紙の写真集として出版された先の『型紙研究』に収録されている、鎌倉芳太郎氏の小論「古琉球型紙」の中でそれぞれ、紺屋の職種や「びんがた」の語源を考察する上で資料としてあげられている。

以下に『型紙研究』の中で納殿資料がどの様に活用されたか見ていきたい。

まず紺屋の仕事内容について鎌倉氏は、紅型を染めていた紺屋が紅型や藍型だけでなく紙の加工も生業としていたことに対する論考において、唐型紙と呼ばれる技法とそれを伝承していた知念家の家伝を説明し、「染紙注文書」の写真図版を掲載している。

型染めを家伝とする知念家の始祖の父である唐紙知念が中国へ渡り、唐型紙の技法を学んだが、当時、技法を伝承すべき実子がいなかったため、妻とその前夫の間に生まれた子を養子とした。しかし、その後、実子に恵まれたため、養子には紅型と藍型を、実子には唐型紙を伝えたとある。

鎌倉氏は、もともと染色に携わっていた唐紙知念が二人の子供に伝承した唐型紙、紅型、藍型の技法から、唐紙の技術を習得したことにより、紙に関わる加工も行ったのではないかと推察し、知念家旧蔵の大台所から納殿へ出された「染紙注文書」を資料の一つとして引用し、知念家が紙染の仕事も請け負っていたと説明している。ただ「染紙注文書」の掲載については、写真のみの引用である。

次に、「びんがた」の語源を考察する上で「染紙

* 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

注文書」「知念宛発注書」の2件が用いられている。

1923(大正14)年9月、琉球芸術に関する展覧会および講演会が財団法人啓明会の主催で東京美術学校において開催された。ここで鎌倉氏は初めて「紅型」という言葉を使っている¹⁴。

その5年後の1928(昭和3)年1月、銀座松屋において有尾江臥堂・石原求龍堂が主催した上里參治氏の企画による展覧会が開催された。この時発行された「古琉球『紅型』衣裳展覧会目録」に掲載された伊波普猷氏の解説文に「紅型」の語を「ベンガル」を由来とした論が展開されている。

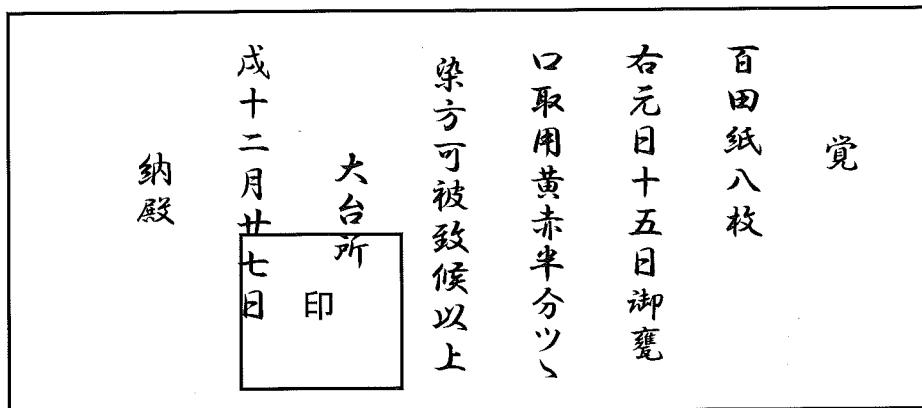
さらに同年出版された『紅型』(巧藝社版)でも同様の記述がある。¹⁵

鎌倉氏は伊波普猷氏の論を謬論とし、多くの資料

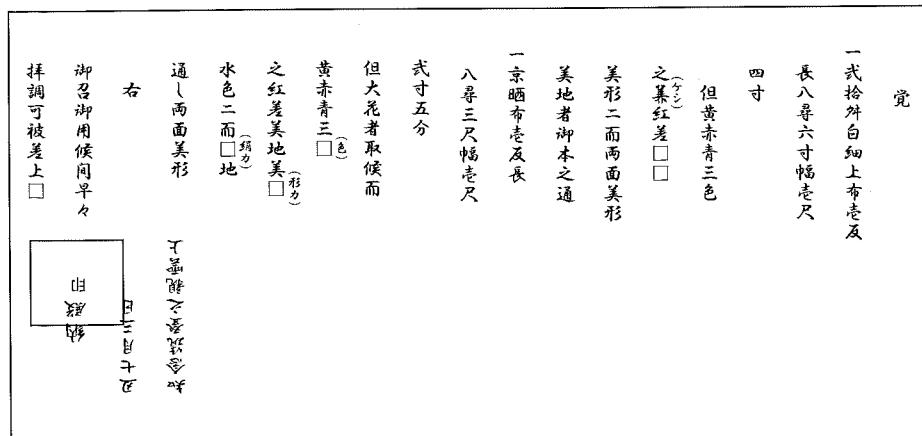
とともに上記の2件の資料を用いて「紅型」の由来を説明し、反論している。ここで氏は、型置き染めのことを沖縄では「形付(かたちき)」、染料を用いたものを「ビンガタ」、藍染めのものを「藍型(ええがた)」と(説明)しており、「ビンガタ」が「ビン」と「カタ」の二つの言葉からできていることから、「ベンガル」とは言葉の性格が違うとしている。

その論拠として氏は、2件それぞれを王府から知念家と澤垣家に出された注文書として提示し、テキストとともに図版を掲載しており、知念家のものには「紅差」、澤垣家のものは「紅入」とある。「紅」すなわち「ビン」とは、狭義では生臍脂の「紅」だが、広義には色によって隈を施すことであると結論づけているのである。

資料1 大台所より納殿宛の染め紙発注書



資料2 納殿より知念筑登之親雲上宛の発注書



このように鎌倉芳太郎氏はこの3件の資料を、紺屋の職種や「紅型」の語源を示す貴重なツールとしてその論考に用いている。

資料の旧蔵者について

鎌倉氏は『型紙研究』中で、「染紙注文書」及び「知念宛発注書」は知念績清氏、「澤底家仕分帳」は澤底仁王氏の旧蔵としており、型紙を含めた紅型に関する資料を誰から、どのように収集したかを記録している。また、これらの資料の入手経緯、及び入手時期についても明らかになっている。なお、調査の詳細については鎌倉氏の著作に詳しいのでここでは特にふれない¹⁶。

鎌倉氏の年譜については原田あゆみ、久貝典子両氏¹⁷の優れた仕事があり、両氏の年譜より沖縄での美術工芸品の調査の時期をまとめると前期・中期・後期の3回にわたって行われていることが分かる。

その3回とは

前期

- ・沖縄県女子師範学校美術教員期
1921（大正10）年～1923（大正12）年
- ・第1回琉球芸術調査期
1924（大正13）年5月初旬

～1925（大正14）年5月

中期

- ・第2回琉球芸術調査期

1926（大正15）年～1927（昭和2）年9月

後期

- ・「歴代宝案」調査期 1933（昭和8）年8月
 - ・城跡発掘調査期 1937（昭和12）年1月
- である。

以上のことから、鎌倉氏は第1回琉球芸術調査期と第2回琉球芸術調査期の間に紅型に関する資料を収集していると諒することができる。ただし、資料収集の時期について『型紙研究』の記載には若干のズレがあり、氏のその他の記述や年譜などで確認する必要がある。

たとえば澤底家の資料収集について『型紙研究』の中で氏は、1940（昭和15）年に両澤底家に訪れて資料の収集を行っていることになっているが、原田・久貝両氏の研究やその当時の状況などから、1926年（大正15）第2回琉球芸術調査期の収集されたものと思われる。後年に発行された『沖縄文化の遺宝』¹⁸（以下『遺宝』と略記する）では大正15年に改められている。

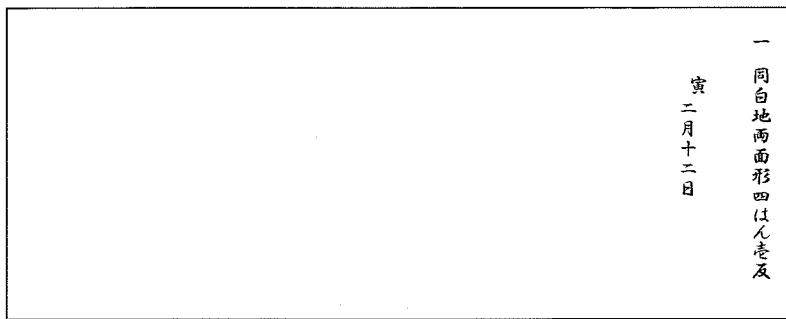
資料3-1 澤底家旧蔵の納殿発注仕分帳

一五色紅入り壹方白地中模様	九外木綿布四はん五及	基 ^{カシ} 本 ^{キム}
一同五はん壹及	一同五はん壹及	一同五はん壹及
一同色形二はん壹及	一同色形二はん壹及	一同色形二はん壹及
一同小模様白地形九外木綿	一同小模様白地形九外木綿	一同小模様白地形九外木綿
布四はん三及	布四はん三及	布四はん三及
一同毛はん武及	一同毛はん武及	一同毛はん武及
一同五はん武及	一同五はん武及	一同五はん武及
一同拾參舛白木綿布壹卷	一同拾參舛白木綿布壹卷	一同拾參舛白木綿布壹卷
壹及	壹及	壹及
一同色彩拾八舛細上布	一同色彩拾八舛細上布	一同色彩拾八舛細上布
三はん壹及	三はん壹及	三はん壹及
一大模様壹方紅入色彩	一大模様壹方紅入色彩	一大模様壹方紅入色彩
九外木綿布四はん四及	九外木綿布四はん四及	九外木綿布四はん四及
一同白地形四はん壹及	一同白地形四はん壹及	一同白地形四はん壹及

資料3-1

寅	正月廿七日	六及	一赤染本綿布武拾	右同	一同三拾七及	赤染	兔正月十三日渡り澤底にや
			一黄染本綿布武拾	玉色染			

資料3-3



このように調査の時期を確認する作業を進めながら、資料収集の経緯を『型紙研究』より追っていくと下記の【表】の通りとなる。

以上のことから、鎌倉氏の資料集は1924（大正13）と1926（大正15）年の2期にわたり、澤垣仁王氏をはじめとして計7人を対象に行っていることが分かる。また、被調査者の中には鎌倉氏が直接聞き取り調査を行ったのではなく、知念積秀氏のように間接的に話を聞いただけの対象者もいるようである。

さて、三点の資料収集の時期をまとめると、「染紙注文書」及び「知念宛発注書」の旧所蔵者である知念績清氏には、1924（大正13）年、「澤垣家仕分帳」を所蔵していた澤垣仁王氏には、1926（大正15）年に調査を行っており、この時にこれらの資料入手したと考えるのが妥当であろう。

高級士族の衣装であった紅型は、琉球処分による王国の解体とともにその基盤を失った。その後の日清・日露戦争の戦勝は「風俗改良運動」のきっかけとなり、大和から入ってくる大量生産された着物により時代遅れと見なされる。そのような中、多くの紺屋が廃業し、一部の染屋が職を求め首里から那覇に移り、風呂敷（うちゅくい）などを染めて、細々と命脈を保っている状態で、近代は紅型にとって決して幸福な時代ではなかった。さらに、鎌倉氏が調査に入っていた大正末期から昭和初期とは第一次世界大戦による好景気がかけりを見せ、「ソテツ地獄」よばれる凄惨な状況が始り、紅型を染めた紺屋だけでなく、沖縄の社会全体が疲弊していた時期である。

また文化的には、沖縄の伝統文化が県外の研究者に評価されるが、県内では近代化による急速な社会

調査年	資料提供者	提供者屋号	年齢	地番	備考
大正15	澤垣仁王	大澤垣	61	那覇市久茂地町77番地	資料を購入
大正15	澤垣 亀	澤垣小	—	那覇市松山町型紙を購入	型紙を購入
大正13	知念績昌	知念ミーハギーの弟の次男の子孫	68	那覇市西新町2-14	下儀保知念の5代目、型紙を譲り受ける
—	知念積秀	知念ミーハギーの弟の次男の次男（寿庵）の次男の子孫	不明	那覇市久米町2-21	上儀保知念
大正13	績清	知念ミーハギーの弟の三男の子孫	71	那覇市若狭町	全て譲り受ける
大正13	松	首里当藏城間家	71	那覇市久米町2-25	
	栄幸		51	那覇市久米町2-25	

変化の中で多く有形・無形文化財が廃棄されようとしていた。このような社会状況の中で3件の資料は鎌倉氏によって収集されたのである⁹。

資料の状態 形態と料紙

納殿資料は大きく分けて知念家旧蔵の「染紙注文書」、「知念宛発注書」と澤垣家旧蔵の「澤垣家仕分帳」の二つにその性質を分類できるのではないかと思う。この事と同様に形態と料紙も二つに分けられる。

知念家旧蔵「染紙注文書」、「知念宛発注書」の二件はそれぞれ、一枚の書状になっており、購入した時点では台紙にセロファンのようなもので貼り付けられていた。

「染紙注文書」（図版1）の状態を記録したものが（図版2）であるが、大きさは縦11.9cm、横が20cmであった。また、縦に六本、約3cm毎に亀裂が入っており、折りたたまれていたことが分かる。

「知念宛発注書」（図版6）は、縦23.8cm、横32.5cmとなっており「染紙注文書」より大きいものになっている。折り跡は縦に10本、横に1本入っている。さらに、文字列が横の折り跡を境に向かい合っており、袋とじにして使用されたことが分かる。状態は、「染紙注文書」がやや良好で、「知念宛発注書」は劣化が進んでいる。両方の文書は墨印が押されていることから、公文書であると考えられる（図版3 図版7）。墨印については、貢納布の見本である沖縄県立博物館蔵の「御絵図」や、京都大学蔵の『琉球資料』に所収されている「貝摺奉行所文書」¹⁰等に捺印されており、これらと比べることによって、王府内でやり取りされた文書の書式や紙の規格を推察する一つの手がかりになると思われる。また、これまで、県の報告書等で朱印が押された辞令書と家譜等についてはまとまった形で報告されているが、王府内でやり取りされた文書については管見の限りにおいて、このような形での報告はなされていない。

今後、各役所から出された文書、その中で特に貝摺・小細・瓦・鍛冶工奉行など職人を統括した部署の資料類を網羅することは、モノの流通や仕事の内容などを把握する上で、重要になってくるのではないだろうか。次に「澤垣家仕分帳」（図版12）だが、「仕分帳」とあるように先の知念旧蔵二つとは形態が違っている。縦11.9cm、横38cmで3枚の紙が縦

に袋に閉じられ、いわゆる大福帳のようになっている。三枚を綴じているものは堅い帶状のもので、左端の横二カ所でつないでいる（図版14）。澤垣家のものは、その内容を詳しく読み解いて分析していく必要があるが、目録の区切りだと考えられるところに、それぞれ、「寅正月十三日」、「寅正月廿七日」、「寅二月十二日」とある。また、ページが日付ごとに区切られるように工夫しており、「寅二月十二日」は三行程度で埋められただけで後は余白となっている。

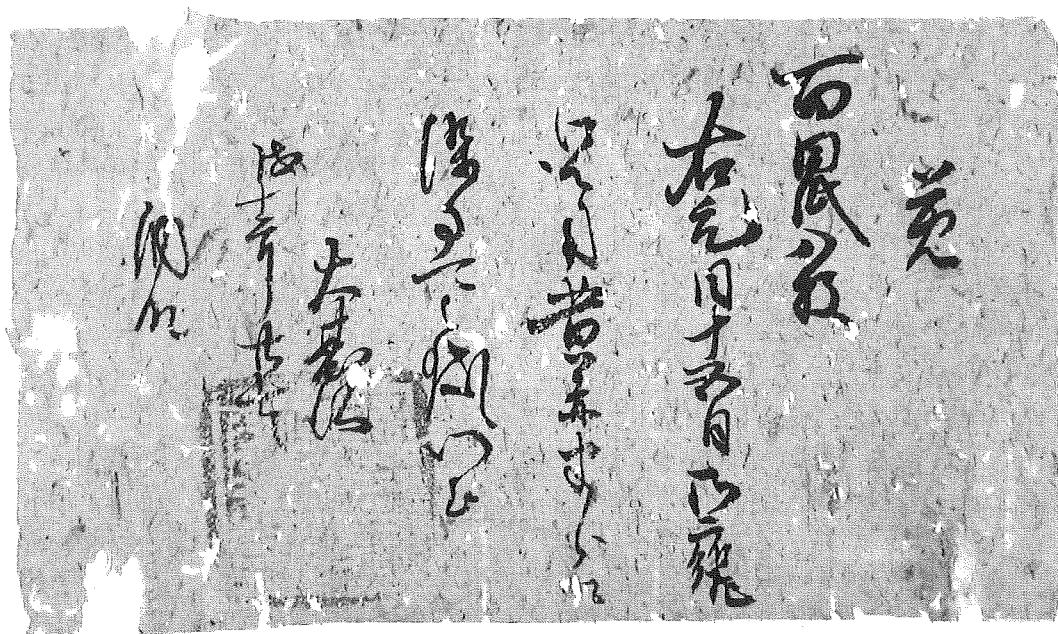
これは題名や内容などから、納殿の注文を記録した仕訳帳であることが分かる。

これまで見てきたように文書の内容や形式は知念家のものと澤垣家のものとの二つに分かれる。これと同じく、紙の性質も二つに分類することができる。

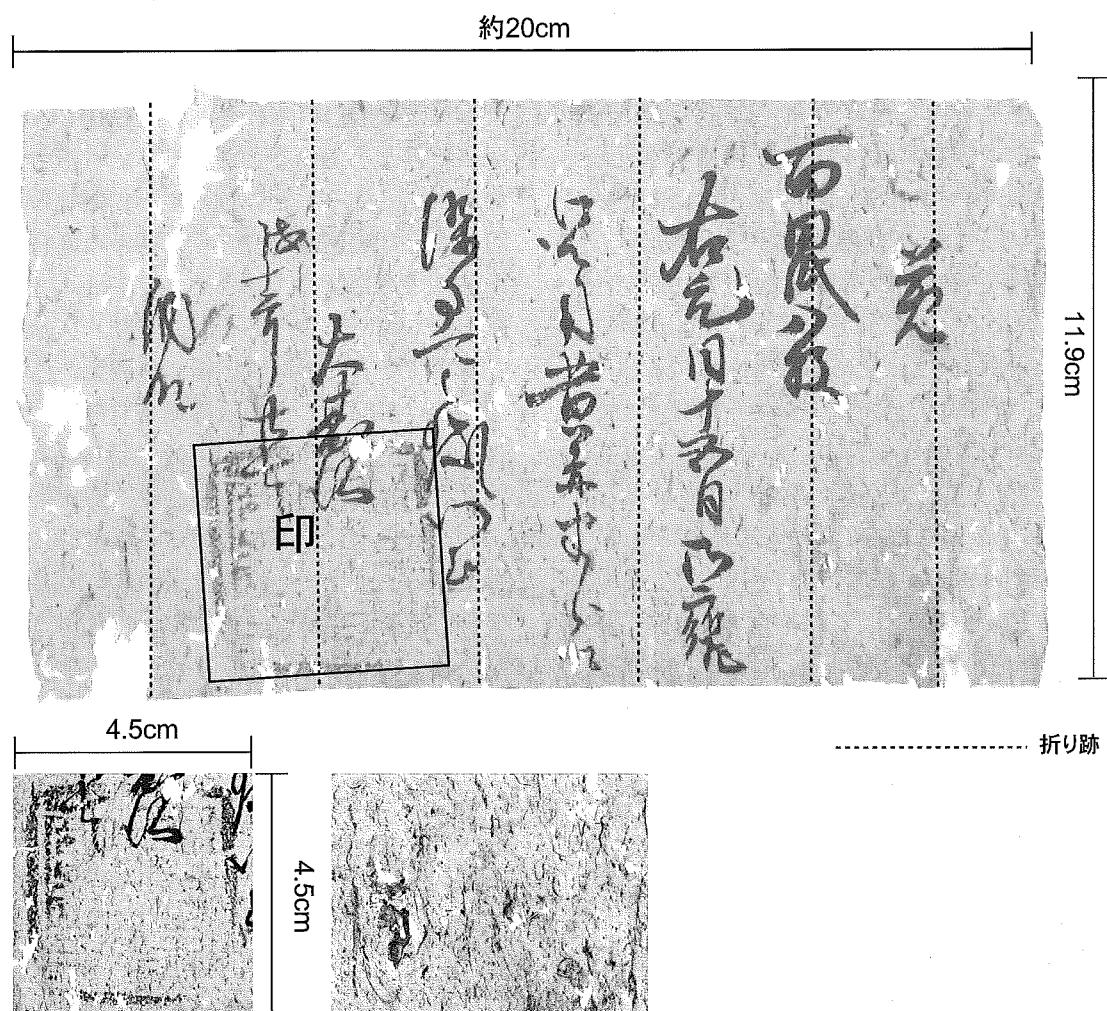
沖縄の場合、紙を大まかに分けると、輸入品である唐紙と国産紙の二つに分けられる。唐紙は中国を中心に日本などからものであり、主に中国福建省で漉かれた紙が用いられたと考えられている¹¹。また、唐紙に書かれているとされる『おもろさうし』などの料紙から鑑みると、竹紙や韌皮纖維の紙が厳選されることなく使われており、様々な素材と質の料紙が舶来されたようである¹²。国産紙は多くの種類の紙が漉かれたようであるが、現在、文献と伝世品より確認できるものは百田紙、杉原紙、芭蕉紙の三つである。杉原紙、百田紙は楮を原料とした和紙で、杉原紙はさらに米粉を加えたようである¹³。芭蕉紙は文字通り芭蕉を原料とし、紙不足を解消するために、王府の命によって開発された沖縄独自の紙で、百田紙など比べると非纖維素が多く混入しており、紙質は荒く、楮紙などの代用として漉かれた¹⁴。それぞれの用途について、杉原紙は現在その実物が確認されていないので述べることは出来ないが、百田紙は公文書用に、芭蕉紙は多くの場合、王府内や間切内でのメモ、または私用に使われたと考えられている。

上記で述べたように、知念旧蔵のものについては公印らしきものが押されており、その内容から公文書だと推察できる。同じように、公文書である辞令書の料紙について、唐紙の竹紙、藁紙と報告されており、その傾向を確認できる¹⁵。さて今回、収集された納殿資料は日常的にやり取りされたもので、近

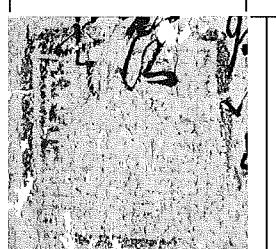
図版1



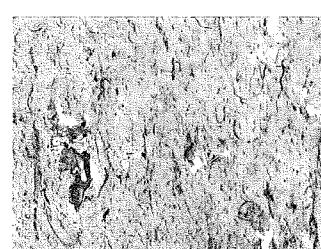
図版2



図版3 印の寸法



図版4 料紙拡大部分

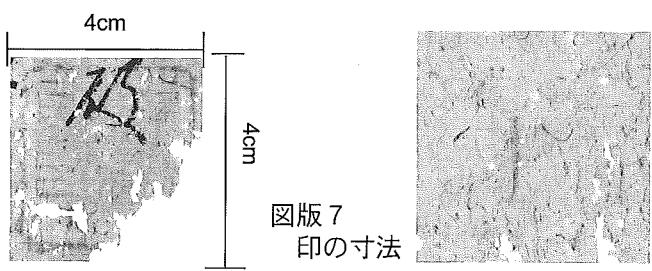
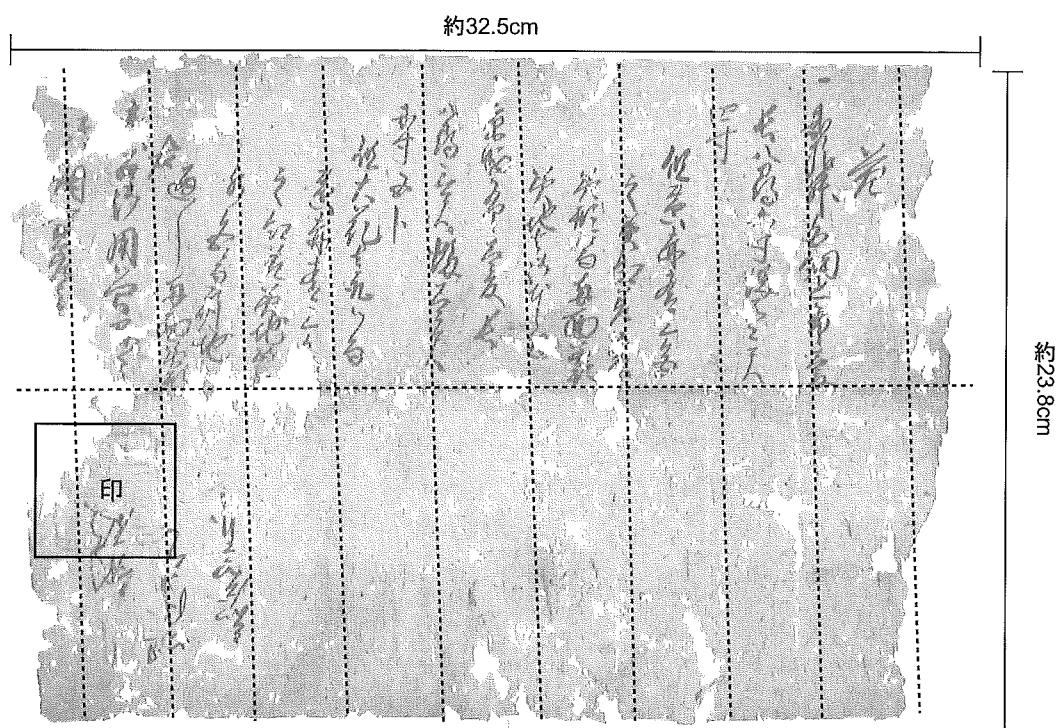


納殿より知念筑登之親雲上宛の発注

図版 5



図版 6



図版 7
印の寸法

図版 8
料紙拡大部分

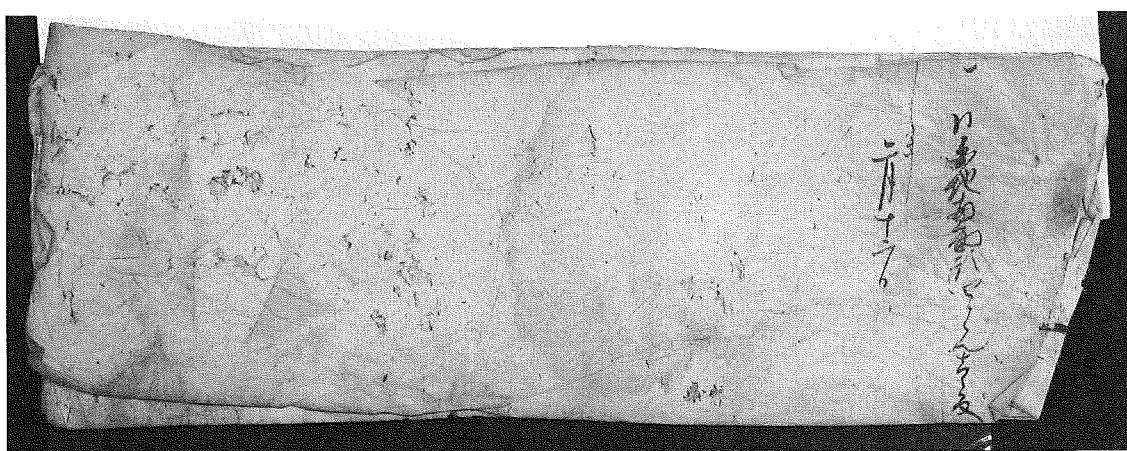
図版9



図版10

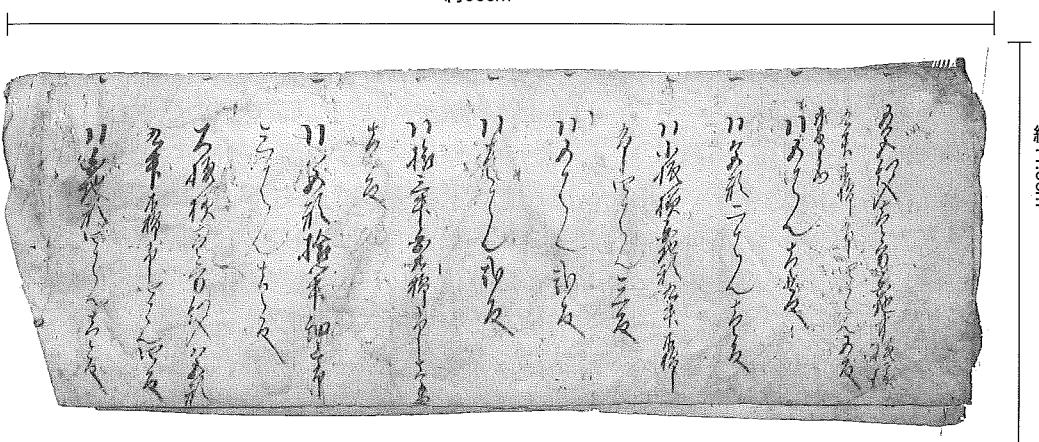


図版11

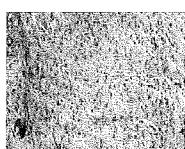


図版12

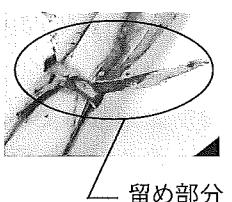
約38cm



図版13



図版14



世以降、高官の就任のみに発行された辞令書とはやや性質の違うものである¹⁶。このことは今後、王府内で使用された紙の品質や流通を再考する上でも重要であると思われる。

では、まず知念家旧蔵のものの拡大部分（図版4 図版8）を見てみると、纖維分が不純物として滲き込まっているのが分かる。特に（図版8）の場合はっきりと纖維群を確認すること出来る。この纖維群は芭蕉の内側の茎の組織となっている部分と外側の茶色に変色した表皮の部分で、芭蕉紙であることが確認できる。

次に澤嶽家のものだが、知念家のものより纖維が細かく、異物などが見られない【資料13】。また、杉原紙の場合はさらに、光沢を出すため餅粉などを混ぜて光沢を出しているよう、この紙にはそういう様子は見られない。このことからも百田紙だということがわかる。

先にも述べたが、一般的に、王府内で漉かれた紙は、百田紙を公文書用、芭蕉紙を記録用としてある程度使い分けがなされていたようである¹⁷。しかし、今回の知念家、澤嶽家の両資料は、公文書と思われる知念家のものは二つとも芭蕉紙で逆に澤嶽家のものは百田紙であった。鎌倉氏によると、これらの資料は、1924（大正13）年、1926（大正15）年の収集時においてすでに120から130年は経過していると述べている¹⁸。料紙についてはおそらく知念家・澤嶽家の資料が書かれた210年前当時、王府内よりも商品や道具として紙を扱う頻度が高かった工房の方が紙を裁量できた可能性が指摘できるのではないだろうか。

おわりに

ここで紹介した3件の納殿関係の資料は、王府が工房にどの様な仕事をどの様な形で依頼していたか、また、どの様にこれら工房を掌握していたかを示す資料ある。さらに今回は、資料の状態や纖維を図版資料として掲載した。そのことによって今後は文字情報からだけでなく紙質や資料の形態など、ものとしての側面からも新たな情報が出てくるのではないだろうか。

末筆ながら、翻刻の掲載を承諾していただいた小野まさ子氏をはじめ、料紙について多くの情報を下さった上江洲敏夫氏には、記して感謝の意を表す次第である。

- 1 琉球王府編 伊波普猷. 1987. 東恩納寛惇 横山重 共編『琉球国由来記』 風土社 58頁
- 2 岡村吉右衛門. 1978. 編輯及解説『琉球古紅型』有秀堂 9頁
- 3 鎌倉芳太郎. 1953. 『古琉球型紙』 株式会社 京都書院
- 4 鎌倉芳太郎. 1953. 19頁 原田あゆみ. 1999. 「鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査と美術観の変遷」『沖縄芸術の科学』 第11号 沖縄県立芸術大学付属研究所紀要』 沖縄県立芸術大学付属研究所 90頁
- 5 伊波普猷. 1928. 『古琉球紅型』解題 巧藝社 5頁
- 6 鎌倉芳太郎. 1953. 鎌倉芳太郎. 1982. 『沖縄文化の遺宝』 岩波書店 242-248頁
- 7 原田あゆみ. 1999.

- 久貝典子. 2003. 「鎌倉芳太郎の芸術調査（上）」
『沖縄文化 第三十八卷二号』
沖縄県立芸術大学付属研究所 波照間永吉研究
室気付
- 久貝典子. 2004. 「鎌倉芳太郎の芸術調査（下）」
『沖縄文化 第三十九卷一号』
沖縄県立芸術大学付属研究所 波照間永吉研究
室気付
- 8 鎌倉芳太郎. 1982 : 243頁.
- 9 企画都市史編集室. 1974. 「那覇市史 通史編
第2巻」那覇市役所 227-229頁
- 渡名喜明. 1980. 『琉球紅型』 京都書院 260頁
- 金城正篤・上原兼善・秋山勝・仲地哲夫・
大城将保. 2005.
- 『沖縄の百年』 山川出版 114-116頁
- 10 沖縄県史料編集室. 1981. 『沖縄県史料 前近
代1』 沖縄県教育委員会 319-426頁
- 11 上江洲敏夫. 1978. 「辞令書の古文書学的考察」
沖縄県教育庁文化課『辞令書等古文書調査報告
書』沖縄県教育委員会 24頁
- 12 上江洲敏夫. 1982. 「琉球紙の歴史」
阿部栄四郎 豊平良頼 柳橋眞 上江洲敏夫
勝公彦『沖縄の紙』 沖縄タイムス社 92-96頁
- 13 上江洲敏夫. 1982 : 128・129頁. 『沖縄の紙』
- 14 糸数兼治. 1976. 「琉球の抄造紙」 法政大学沖
縄文化研究所『沖縄文化研究 3』
法政大学出版局 180・181頁
- 上江洲敏夫. 1982 : 122・123頁. 『沖縄の紙』
- 15 上江洲敏夫. 1978 : 21・24頁. 『辞令書等古文
書調査報告書』
- 16 鎌倉芳太郎. 1953 : 20頁. 『古琉球型紙』
- 17 上江洲敏夫. 1982 : 121・122頁.
『沖縄の紙』
- 18 高良倉吉. 1987. 『琉球王国の構造』
吉川弘文館 51・52頁